■神戸学院大学現代社会学部現代社会学科2024年度
《ゼミナールⅠ／現代社会基礎実習Ⅰ》（担当：番匠健一）第7回

【テーマ：「芸能の街、新開地を歩く。」】

実施日：2024年5月24日（金）

ゲスト講師：村上潔（立命館大学生存学研究所客員研究員）

◎実施要項

◆集合場所・時間

◇**14:00**　JR神戸駅北口「神戸夢見鶏」前【集合】

　＊地図：https://maps.app.goo.gl/kdNokFd945L2mcP49

◇14:00～10　【趣旨説明】

◇14:10　【スタート】

◆終着地点・時間

◇15:05　湊川公園時計塔前【ゴール】

　＊地図：https://maps.app.goo.gl/D8rKTENxjTBLn2G68

◇15:05～15　【総括】

◇**15:15**　【解散＊その後オプション行程があるかも】

◆注意点

◇感染症対策を十分意識して参加してください。

◇途中休憩はありません。飲料水を各自持参し、適宜水分補給してください。

◇スマートフォン等で資料を確認したり、情報を調べたりするのは、立ち止まったときにしてください。歩いているときは、周りの風景全体をよく観察し、視覚以外の感覚も意識して空間の雰囲気を感知するようにしてください。

◎参考資料

◆新開地の芸能・芸術に関する情報

◇新開地アートひろば（旧：神戸アートビレッジセンター［KAVC］）

https://s-ah.jp

―“新開地は、かつて大衆演劇から映画まで多種多様な文化が入り混じる神戸随一の興行街として栄え、神戸の都市文化を生み・育ててきました。新開地アートひろばは、アートの力を通じて、新開地をさらに活気あふれる街にしたいという想い※から、平成8（1996）年に開館した神戸アートビレッジセンター（KAVC）を前身に、時代のニーズに合わせて、令和5（2023）年4月にリニューアルオープンした文化施設です。”

◇シネマ神戸
https://cinemakobe.jimdofree.com
—“昭和32年から新劇会館→シネマしんげき→Cinema KOBEと歴史を刻み、お陰様で60年目の老舗2番館!! 迫力の大スクリーンと重厚な音響をぜひ☆”
◇パルシネマしんこうえん
http://www.palcinema.net
—“パルシネマしんこうえんは昭和46年に開館した名画座で、ロードショーが終了した作品の中から厳選した名画を昔ながらの二本立てで上映しております。｜二本立て上映とは1スクリーンで2つの作品を交互に上映することで、また各回ごとの入替えがありませんので2作品ともご覧いただけます。”
◇新開地劇場
https://www.shinkaichigekijou.com
—“昭和21年（1946年）11月。｜ミナト神戸の興行街・新開地の実演劇場として誕生した新開地劇場。芝居と歌謡ショーを上演し、人気を博しました。｜昭和22年から23年までは、映画スターの巡業先として嵐寛寿郎、長谷川一夫、山田五十鈴などが出演。｜大衆演劇界からは、梅沢昇、金井修、女剣戟の大江美智子、不二洋子、浅香光代などが公演。｜歌手では藤山一郎、岡晴夫、近江敏郎、田端義夫、村田英雄、美空ひばり、江利チエミ、雪村いずみなど、往年の大スターたちが新開地のステージを飾りました。｜現在の劇場は阪神淡路大震災を乗り越え、大衆演劇専門館として、平成7年（1995年）12月6日、柿落とし公演を披露した新劇場です。”
◇神戸新開地・喜楽館
https://kobe-kirakukan.jp
—“2014年夏、当時の上方落語協会会長が「神戸あたりにも上方落語の定席を」と発言された内容の新聞記事を見た商店街の若手が1通の手紙を送ったことが、神戸新開地・喜楽館の実現の最初の第一歩です。｜その手紙には、かつては演芸があちらこちらで盛んだったこと、「東の浅草、西の新開地」と謳われ神戸随一の歓楽街であったこと、現在でも新開地寄席や兵庫区民寄席などが人気であることなど、新開地での寄席の復活を切望する想いがつづられていました。［…］神戸新開地・喜楽館は、昼は上方落語の定席、夜は上方落語はもちろん、東西落語、講談、浪曲などの演芸のほか音楽、ダンスなど、幅広く楽しむことのできる演芸場として、〔2018年〕7月11日（水）開館いたします。”
◇神戸新開地音楽祭
https://ongakusai.shinkaichi.or.jp
—“神戸新開地音楽祭は、2日間で250組以上のミュージシャンが出演。｜関西一円から約8万人が訪れます。｜まち全体がステージとなり、観客と一緒に楽しめる初夏の名物音楽祭です。［…］故・淀川長治さんを生み、かつて、神戸文化の一翼を担った「新開地」。｜本物で庶民的なまちには、個性的な人々が集まり、雑多で活気があり、人情と風情とこだわりが受け継がれてきました。｜大震災の後も新しい形で引き継がれてきたこのまちの魅力を、多

くの人にわかりやすく伝えたい、そんな想いで音楽祭を始めました。”
◇神戸新開地ジャズヴォーカルクィーンコンテスト
https://shinkaichi.or.jp/ksjvqc/
—“神戸新開地地区は、かつて「東の浅草、西の新開地」と謳われ、1km弱の新開地本通りに20以上もの劇場・映画館が並ぶ一大歓楽街でした。「聚楽館」をはじめとする地区内の劇場や、湊川公園の野外ステージ「音楽堂」では、戦前からジャズの演奏会が賑やかにおこなわれ、ジャズ喫茶などでも気軽にジャズを愉しむ文化が根づきました。昭和28年には、ジャズの神様と言われたルイ・アームストロングが、聚楽館で本場のジャズを聴かせてくれたという逸話もあります。｜そんなジャズ文化を継承すべく、新開地ミュージックストリートがスタート。2000年より「神戸新開地ジャズヴォーカルクィーンコンテスト」、2001年より「神戸新開地音楽祭」を開催しています。”
◇メトロこうべ
https://metrokobe.jp
—“「メトロこうべ」は高速神戸駅から新開地駅をつなぐ地下街です。｜神戸高速鉄道の開通から半年後にオープンし、2018年に開業50周年を迎えました。｜約700メートルにわたる地下街には、どこか懐かしい居酒屋、人気お惣菜店、市内最大級の卓球場など、親しみやすいお店が軒を連ねます。｜レトロな雰囲気はそのままに、トリックアート、巨大壁画、ストリートピアノなどの新スポットも続々と誕生しています。｜2022年3月には約30年ぶりに中間通路の大規模リニューアルを実施し｜中央広場が「metro＋(メトロプラス)」という愛称で新たに生まれ変わりました！｜歩きながら楽しめる地下街「メトロこうべ」に、ぜひお越しください！”
◇新開地ファン
https://shinkaichi.or.jp
—“新開地ファンは神戸・新開地の魅力を新開地ファンがお届けする新開地情報サイトです。”

◆関係記事
【注記：以下の記事引用は、すべて授業での教育利用を目的としたものです。】

◇（関西のナゾ）神戸の中心街、なぜ「三宮」　戦後復興、新開地からにぎわい東へ
　2023年1月1日『朝日新聞』朝刊　神戸・1地方　029ページ　01866文字

　関西地方の各府県には「ナゾ」がたくさんあります。新たな年の始まりに、深掘りしてみました。
　おしゃれで異国情緒あふれる港町・神戸。全国的にも知名度の高い都市だが、中心地のJRの駅は「神戸」ではなく「三ノ宮」。再開発で新たなビルが立ち並び、JRのほか阪急、阪神などの6路線が乗り入れるターミナル駅として栄えている。なぜ神戸の中心駅は「神戸」で

はないのか。
「神戸の中心地の最寄り駅はどこですか？」
阪神電鉄には、10年ほど前からそんな問い合わせが寄せられるようになったという。当時、最も中心街に近い駅は「三宮」。だが遠方の利用者の中には約2キロ西の「高速神戸」駅を中心と思う人もいたようだ。
阪急は2013年、阪神は14年に、神戸の中心駅だと分かりやすくするため、それぞれ「三宮」駅を「神戸三宮」駅に改名した。
神戸の中心にはない「神戸」駅。その謎を解くためには、歴史をひもとく必要がある。
神戸の歴史や生活文化に詳しい園田学園女子大の田辺眞人名誉教授（75）によると、神戸の中心街は昔、いまよりずっと西にあった。最も栄えていた地域は、現在のJR兵庫駅の南東部。鎌倉時代から兵庫津（ひょうごのつ）と呼ばれ、瀬戸内海の交易の拠点として繁栄した。
戦前には「御旅（おたび）市場」という大規模な商店街があり、終日にぎわった。近くで創業88年になる飲食店「ちから」を営む猪師（いのし）節子さん（84）は、先代店主から「買い物客で栄えていて、そらもう華やかやった」と聞かされた。
一方、現在のJR元町駅あたりの沿岸部には、神戸港があり、貿易の拠点となっていた。
神戸駅は1874年、現在の位置より約1キロ西寄り、商業と貿易の中心地の間につくられた。
その後、神戸駅南側の沿岸部には川崎重工業などの工場が集積。近くの新開地は、映画館や劇場が立ち並び「東の浅草、西の新開地」と称されるほどの歓楽地としてにぎわいを見せる。
まさに、神戸駅は神戸の中心にあった。
だが、時代はあらゆるものを変えて、流れた。
太平洋戦争で、兵庫駅周辺は空襲の標的になる。一帯は焼け野原となった。
復興の中で、商いの場は東へ移っていった。闇市が集まったのが元町駅周辺の高架下。現在も「モトコー」の愛称で商店街が残る。1947年から営業する輸入洋品店「MR．BOND」の3代目店主、岡幸雄さん（38）は「焼け野原で雨風をしのいで商売ができたのがガード下だったようです」と話す。
57年には兵庫区にあった神戸市役所が三宮に移転した。田辺名誉教授によると、市役所移転がきっかけとなり、三宮周辺に新たな商店が集まっていった。新開地のにぎわいを支えた映画や劇場といった娯楽も、急速に普及したテレビに押されていき、60年代ごろには三宮が経済や行政の中心地になったという。
新開地はいま、昔の風情を残す商店や飲食店を求める人たちでにぎわう。2018年には上方落語の定席「神戸新開地・喜楽館」が開館。芸能の街としての姿を取り戻そうとしている。
歴史の荒波の中で、姿を変えてきた神戸の街。今後は、どのように時代の変化をすくい取って変わっていくのだろう。（宮島昌英）

◇モチャコ（地域ニュースサイト号外NETライター）　2024　「【神戸市】音楽が新開地界隈をジャックする！　心に響く二日間、神戸新開地音楽祭で新しい自分発見しよう♪」，Yahoo!ニュース，2024年4月27日，
（https://news.yahoo.co.jp/expert/articles/04bc0eeb0616765ffb1719ea7bf7267dc48098f0）

◇噺家ら喜楽館でブギウギに挑戦　桂あやめさん発案　7～12日　寄席の最後に　神戸・新開地

2024年5月5日05:30『神戸新聞NEXT』
https://www.kobe-np.co.jp/news/kobe/202405/0017616932.shtml

噺家（はなしか）らが結成したバンドの演奏が楽しめる「神戸新開地音楽祭＠喜楽館」が7～12日、神戸新開地・喜楽館で開かれる。音楽祭をさらに盛り上げようと、新開地で育った桂あやめさんらが企画。「今回はブギウギ音楽に挑戦する。陽気な気分になって」と話す。（津田和納）

企画は3回目。発案者のあやめさんは音曲漫才が持ち芸で、今年はサックスを担当する。「ストリート全体が舞台なので、その一部として喜楽館にも訪れてほしい」と思いを込める。

あやめさんら噺家で組む「ホーンなあほな」は9人組。トランペットやアコーディオン、ドラムなど楽器を持ち寄り、寄席の最後に30分のステージを上演する。ジャズの「聖者の行進」から「ヘイヘイブギ」まで曲は多様。桂九雀さんは「水を得た魚のような楽しさ。若手からベテランまでがそろった演奏を見て」と話す。

ほかに、月亭遊方さんや桂小春団治さんが出演。一般前売り2300円。喜楽館TEL078・335・7088

□

神戸新開地音楽祭は11、12日正午～午後7時半、湊川公園や新開地商店街など10カ所で開かれる。全国から集まった歌手やグループ約280組が出演し、ジャズやブルースなど個性豊かなステージを披露する。屋台村（正午～午後7時半）や新開地マルシェ（正午～午後6時）もある。「新開地まちづくりNPO」TEL078・576・1218

◇遊んでアートに親しむ　新開地、文化施設がリニューアル

2023年5月9日『朝日新聞』朝刊　淡路・1地方　021ページ　00599文字

演劇や美術、音楽の発信の場として親しまれてきた複合文化施設「神戸アートビレッジセンター」（神戸市兵庫区新開地5丁目）が新たに「新開地アートひろば」として4月末、リニューアルオープンした。

同センターは、市が1996年に開館。かつて大衆文化を支えた新開地のにぎわいを取り戻そ

うと、ギャラリーやシアター、演劇の練習ができるスタジオなどの設備を備えた。17階建ての分譲マンションの地下1階と地上4階建て部分の延べ4376平方メートルを利用している。
　だが老朽化が進んだことや、子どもや子育て世代も利用しやすい施設作りのため、昨年10月から休館していた。
　施設によると、新たに授乳室や、主に小学生までの子どもが遊べるフリースペースを設けた。子どもたちやその保護者も立ち寄りやすい施設になり、あらゆる世代が交流できる地域の文化拠点を目指すという。これまで通り多機能ホール（232席）やスタジオも利用できる。
　館長の大谷燠（いく）さん（70）は「次世代を担う子どもたちにも、ひとつの居場所として、遊びの中でアートに触れて創造性を育んでもらいたい」と話した。
　火曜休館。入館料は無料。問い合わせは新開地アートひろば（078・512・5500）へ。（宮島昌英）

◇元気な音色、待ってたよ　3年ぶり「新開地音楽祭」、きょうまで
　2022年5月8日『朝日新聞』朝刊　神戸・1地方　019ページ　00419文字

　街全体をジャズやロックの音色で彩る「第20回神戸新開地音楽祭」が7日、神戸市兵庫区の湊川公園や新開地商店街一帯で始まった。新型コロナの影響で3年ぶりの開催。8日までの2日間、計約200団体が歌声や演奏を披露する。
　レコード盤に例えて「神戸のB面」として親しまれる新開地。音楽祭は街の発展や阪神・淡路大震災からの復興を願い、2001年に始まった。
　今年は歓声を禁止し、手拍子でエールを送るなど感染対策をしながらの開催だ。運営を手掛けるNPO法人「新開地まちづくりNPO」の藤坂昌弘事務局長（39）は「久しぶり、待ってたよという声がうれしい」と笑顔だ。
　会場はメインステージのほか、新開地駅の構内や商店街の中、飲食店内など12カ所にステージを設備。公園内には、ご当地グルメが味わえる屋台が並ぶ。
　8日まで、正午〜午後7時。入場無料。各タイムテーブルなど詳細は、公式ウェブサイトへ。（岩本修弥）

◇［まちかどストーリー］新開地商店街　文化、芸能　新しい息吹
　『読売新聞』2010年3月14日（日）大阪朝刊　神明2　35頁　3,280文字

　◇神戸市兵庫区
　約300店が南北約1キロに伸びる路地に集まる新開地商店街（神戸市兵庫区）。南端には、山高帽姿の男性をかたどった、色鮮やかな「シンボルゲート」が出迎えてくれる。そのモデルは、かつてこの地を歩いたという、英国の喜劇王・チャップリンだ。映画館や芝居小屋がひしめき合い、映画評論家、淀川長治さんが育った歓楽街。そんなかつての街を復活させよ

うと、1991年に始まったのが「アートビレッジ構想」だった。
　若手芸術家たちの活動拠点として96年、「神戸アートビレッジセンター」が完成。新開地劇場は建て替えられ、ボーリング場などを備えた大型商業施設も出店。若者からお年寄りまで幅広い世代で楽しめる「娯楽の街」としての要素も取り入れてきた。
　NPOや商店街組合は、様々なイベントを企画する。2日間で5万人超を集客する音楽祭や、若い女性にターゲットを絞った映画祭は、新たなファンを獲得した。
　前回は湊川公園から国道28号までを中心に取材したが、今回は神戸高速鉄道新開地駅から南側で、文化と芸能の息吹を感じに出かけた。
［…］
　┃ほれた街　イベントでPR
　街づくりの企画立案を担当する「新開地まちづくりNPO」（078・576・1218）は事務局を「まちづくりスクエア」に置き、専任スタッフ5人と地元住民らが連携して活動する。
　スタッフは街にほれ、全員移り住んだ。新たな魅力を掘り起こし、「B面の神戸」としてPR。今年で10回目となる「神戸新開地音楽祭」や女性限定のまち歩きツアーなどのイベントで、新たなファンも生まれた。
　広報担当の西島陽子さん（36）は「どの店もこだわりを持っている。ぶらりと訪ねたくなる街にしたい」と話す。
［…］
　┃若い才能の芽期待
　鉄骨むき出しの外観と色鮮やかな5色ののぼりが目をひく「神戸アートビレッジセンター」（078・512・5500）は、映画や演劇でにぎわった新開地の新たなシンボルになりつつある。地下の映画館では、アジア映画やドキュメンタリーなど、ここでしか見られない作品を上映。
　安価で借りられる同階のスタジオでは、若いミュージシャンたちが練習に没頭。若手アーティストの美術展や新鋭劇団の公演にも力を入れており、副館長の中村誠至さん（38）は「新開地から若い才能が芽を出してくれるはず」と期待する。
［…］
　┃役者近くに感じて
　開業64年を迎える「新開地劇場」（078・575・1458）は、神戸唯一の大衆演劇小屋。1か月ごとに劇団が入れ替わり、涙と笑いの人情劇を毎日2回上演する。
　劇場主の渡辺将人さん（29）は、同じ脚本でも各劇団の演出で様変わりする面白さや、観客と役者が触れ合う姿にひかれ、2008年11月に先代の祖母、春美さん（76）の跡を継いだ。「役者との距離の近さが、大衆演劇の最大の魅力」と若者にもPRする。
［…］
　〈ひとこと〉
　昨年11月末のこのコーナーで、国道28号を挟んだ北側を紹介しました。それから3か月、プライベートで数回訪れています。マニア心をくすぐる映画館があり、2000円で大満足でき

る飲み屋があり、何より、どこか懐かしい雰囲気がここにはあります。
　異国情緒あふれるミナト・神戸ももちろん良いのですが、人情味たっぷりの「B面の神戸」には、よそ者を受け入れてくれる懐の深さを感じます。
　また、「アートの街」としての印象も強くしました。新開地は元々、映画や演劇の街として親しまれた場所。レトロさが残る一方、前衛的なものも受け入れる風土が歴史的にあると思います。だからこそ、まちづくりスクエアや神戸アートビレッジセンターの存在が街に活気を与えています。〈新開地発〉のミュージシャンや芸術家が誕生する日も、そう遠くはないかもしれません。
（上村真也）

◇［週刊まちぶら　番外編］神戸100年映画祭・新開地映画祭　手作り運営
　『朝日新聞』2010年10月24日朝刊　東兵・2地方　030ページ　03041文字

　日本で最初に映画が上陸した神戸市で、もうすぐ二つの映画祭が開かれる。クラシック映画に力を入れる「神戸100年映画祭」と、女性スタッフが企画した女性限定の「新開地映画祭」。どちらも映画好きの市民が中心になった手作り運営。「おうちでシネマ」の時代だからこそ、みんなで見る楽しさを伝えたいという。（深津純子）
　エジソンが発明したのぞきからくり式映画「キネトスコープ」の神戸渡来が1896年。そのちょうど100年後に神戸100年映画祭は始まった。
　前年の阪神大震災を受けて「心の復興」が旗印に。官民共同で迎えた第1回は、多数の著名映画人が参加する華やかなものだった。だが、神戸市の助成が減り、規模が縮小。8年前に運営主体をNPO法人化し、市民参加型で再出発した。
　15回目の今年は、市内の4会場で上映がある。開幕上映の「RAILWAYS」には、主演の中井貴一さんも参加（27日・神戸新聞松方ホール）。「剱岳　点の記」の木村大作監督の講演と、神戸ロケした撮影作品「華の乱」の上映もある（11月3日・県民会館ホール）。
　特別顧問だった神戸出身の映画評論家・淀川長治さんの遺志を継ぎ、古い映画も大事にする。日本名画特集（10月29、30日・ピフレホール）は、黒沢明監督の「羅生門」、山本薩夫監督の「不毛地帯」、田中絹代主演の「西鶴一代女」。生誕100年を迎えた名匠・名女優の代表作をそろえた。11月18～20日の「淀川長治メモリアル」は、本人の解説映像つきの「戦艦ポチョムキン」などの名作を、淀川さんが育った新開地の神戸アートビレッジセンター（KAVC）で連続上映する。
　一方、KAVCで10月29～31日に開かれる「新開地映画祭」は、「愛の新世界」「女教師汚れた放課後」など性愛を描いた7作を女性客限定で上映するユニークなもの。映画街の衰退でくすんでしまった町を映画で元気づけようと、地元のNPOが始めて8年になる。
　「オシャレな元町とは好対照の新開地は“B面の神戸”。『ラブ＆エロス』というテーマを面白がる女性なら、B面の魅力もわかってくれるはず」と事務局の西島陽子さん。ゲスト女優とのQ＆Aは毎回きわどい話題が続出。ストッキングのファッションショーなど「オンナ

度」を上げる企画も用意する。

◇みんなで見る大画面は格別（記者ナビ）

年間の封切り映画が各都道府県で商業上映された割合を示す「公開率」という数値がある。直近の2007年調査で兵庫は56％（コミュニティシネマ支援センター調べ）。全国平均の43％より上だが大阪の75％、京都の65％には届かない。往年の映画都市の現実だ。

シネコン時代でスクリーン数は増えたが、上映はヒット作中心。映画の多様性が失われる中、地域の映画祭の役割は大きい。行政の財政難で消えたものもあるが、神戸の二つの映画祭は市民主導で頑張っている。

上映作品にはDVDで見られるものもある。だが、映画好きの人々と大画面を見る体験はやはり別格。ゲストの話やQ＆Aで楽しさが増す作品もあれば、会場で友達ができることも。いろんな出会いが待っているから、映画祭は楽しい。

〇感想熱く語る姿にグッ

神戸100年映画祭の藤間和則実行委員長（34）は神戸市職員。仕事が終わった夜や休日は映画祭の準備に追われる。劇場に思い入れはないビデオ世代だが、「悪天候でも上映に駆けつけ、感想を熱く語る観客の姿にグッときた。みんなでワイワイ見るのは別の体験ですね」。年長の映画好きの話を聞いて、見たくなった映画も多い。悩みは上映用フィルムを貸し出さない旧作が多いこと。「まだ『七人の侍』をスクリーンで見たことがないんです。いつか上映できたらいいなあ」

＊

NPO神戸100年映画祭　神戸市中央区の兵庫県立美術館ホールで毎月上映会を開いている。次回は11月26日の「オズの魔法使（つかい）」。078・954・8044

〇食わず嫌い撲滅へツアー

新開地映画祭の広報担当の西島陽子さんは、第1回の時にボランティアで参加したのが縁で、主催者の「新開地まちづくりNPO」のスタッフになった。「大阪出身なので、神戸の友達に『新開地って怖くない？』と言われてびっくり。中に入るとあったかい人ばかりですよ」。食わず嫌いを撲滅するべく、地元の名店を巡るツアーなども開催する。「どの店にも物語があり、知れば知るほど面白い。時代に流されず、ぶれずにやってきた街だから、掘り下げてみたくなるんです」

＊

新開地まちづくりNPO　1999年設立。音楽祭、寄席、「まちかどガーデニング」など、多彩な企画で町を盛りあげる。078・576・1218

〇レトロな空間は客船風

昭和の香り漂う新開地でもひときわレトロな空間なのが創業63年目の「喫茶エデン」。客船風の家具や内装は創業当時からのもの。「出前先の船舶内装業者さんが、コーヒー代と引き換えに作ってくれた。おおらかな時代だったんですね」と2代目マスターの堺井太郎さん（57）。ふだんはサンドイッチと飲み物だけだが、新開地映画祭の間は、地元の人気店から仕入れた神戸スイーツのセットを出す。「男子禁制で上映は見られないけど、女性客が増え

るのは大歓迎。気軽に遊びに来て下さい」

＊

喫茶エデン　ネルドリップでいれるコーヒーは350円。大みそかと元日以外は無休。午前8〜午後6時（日曜・祝日は午前8時〜正午）。078・575・2951

〇勧められ名場面　油絵に

1950年代には20以上の映画館が軒を連ねた新開地。「映画を見る金がなくても、看板を見るだけで楽しめた」と言う山中一夫さん（71）は、子供時代から通うこの街で映画館の看板画家として働いた。引退後は趣味で人物画を描いていたが、神戸100年映画祭スタッフの勧めで映画の名場面の油絵を始め、絵画教室も開く。「看板があれば遠くからでも映画館の場所がわかった。いまはみんなビルの中。ポスターが張ってあるだけでは、探しにくくて不便だよね」

＊

映画を描く会　山中さんを講師に神戸アートビレッジセンター会議室で毎月開催。次回は31日午後1時半〜。見学者も歓迎。090・1021・0724

［…］

【写真説明】

両映画祭の上映がある神戸アートビレッジセンター周辺は往年の映画街。「東の浅草、西の新開地」と呼ばれるにぎわいだった＝神戸市兵庫区